

企業での活躍の場 開拓

審査委員 岡崎 哲二 (東京大学教授)

渡辺氏の研究者としての特徴の一つは、その研究分野の多様性。産業組織論、マーケティング、法と経済学、政治経済学、医療経済学等の各分野でトップレベルの国際学術誌に数多くの論文を発表してきた。

他方、氏の研究は詳細なマイクロデータが提供する豊かな情報をマイクロ経済学モデル、ゲーム理論モデルと結び付けて分析し、新たな知見を得るという点で一貫しており、それがもう一つの特徴となっている。

学問上、渡辺氏の顕著な業績は大きく二つの領域に分けることができる。その一つは、従来、実証分析の対象とされてこなかった交渉、投票等に関するゲーム理論的モデルを構築し、それとマイクロデータを統合して、政策的に重要な論点を検証したことである。

このように、理論的モデルを基に反実仮想的な政策の効果を考えることで政策評価を行う手法は「構造推定アプローチ」と呼ばれている。渡辺氏はこれを用いて医療過誤訴訟の和解プロセスのデータから弁護士費用規制の効果を分析したほか、米国の地銀データを使って参入規制の変更が合併行動に及ぼす変化を検証している。

もう一つの顕著な業績が「因果推論」を用いた一連の研究である。これはマイクロデータの示す複雑な相関関係から種々のバイアスを除去して因果関係を識別する手法で、東日本大震災が高震度地域の住民のリスク選好に与えた影響や、医師臨床研修制度の導入が医師の賃金・病院へのアクセスと死亡率に与えた影響等、日本のデータも用いながら様々な研究を行い、内外から高く評価されている。

教科書レベルでは抽象的で非現実的と受けとられがちなマイクロ経済学やゲーム理論が、近年のデータ環境の変化と計量分析手法の進歩により、現実的な問題に具体的な回答を与える学問へと変貌を遂げつつあることを渡辺氏の一連の研究はよく示している。

実証マイクロ経済学の道具の有用性は学問の世界に限らない。それを自ら証明するように、渡辺氏は昨年夏に香港科技大学からアマゾンジャパンに移籍、現在はシニアエコノミストとして同社の社内で実証マイクロ経済学を応用しながら様々な経営上の意思決定をサポートしている。

マイクロ経済学が企業の現場で活用され、そのために経済学者が雇用されるという近年の新しい動きは米国 IT 企業にとどまらず、広がり始めているが、渡辺氏の活動は日本におけるこうした動きの先駆けともいえ、エコノミストとしての活躍の場を広げた点も高く評価された。